会　員　通　信

京都大学農学部附属水産実験所に水産生物標本館新築
Newly Built Aquatic Natural History Museum at the Fisheries Research Station, Kyoto University, Maizuru, Kyoto 625

京都府舞鶴市長浜に所在する京都大学農学部附属水産実験所に長年要望していた待望の水産生物標本館（3 階建，延床面積 1,860 m^2，公式英名 Aquatic Natural History Museum，略称 Aquat. Nat. Hist. Mus.）が約 50 人の宿泊能力を有する宿泊所とともに 1984 年 3 月末に完成した．

海側から見た水産生物標本館

本標本館は，魚類，海産無脊椎動物，藻類などの水産生物（とくに魚類が充実）の分類学研究の基礎になる標本の恒久保管を目的として建設された．標本館は 3 階建で，1 階には受付兼事務室，大型液浸魚類標本室，標本整理室（付 −30°C 冷凍庫，+5°C 冷蔵庫および 2・3 階の中・小型液浸魚類標本室 1・2 を連絡するダムウェーター），魚類骨格標本室，魚類分類学実習室，水産生物学実習室などがある．2 階には魚類標本室 1（中・小型魚類液浸標本を収容：標本の配列は科毎にほぼ日本魚類学会編の日本魚名大辞典の分類リストの配列に従って科番号を与え，頭索類 0；円口類ヌタウナギ科 1，メクラウナギ科 2，ヤツメウナギ科 3；軟骨魚類サメ類 4-1～18，エイ類 5-1～8；全頭類ギンザメ科 5A，テングギンザメ科 5B，ゾウギンザメ科 5C；硬骨魚類のチョウザメ科 6 からアマダイ科 134 まで），卵仔稚魚標本室，魚類研究室，浮遊生物研究室，藻類・ベントス研究室，セミナー室が設置されている．3 階は魚類標本室 2（2 階の魚類標本室 1 の続きで，中・小型魚類液浸標本を収容：硬骨魚類のアジ科 135 からタウナギ科 266 まで），プランクトン・ベントス標本室，海藻標本室，文献室，ソフテックス撮影室（暗室兼用）を備えている。

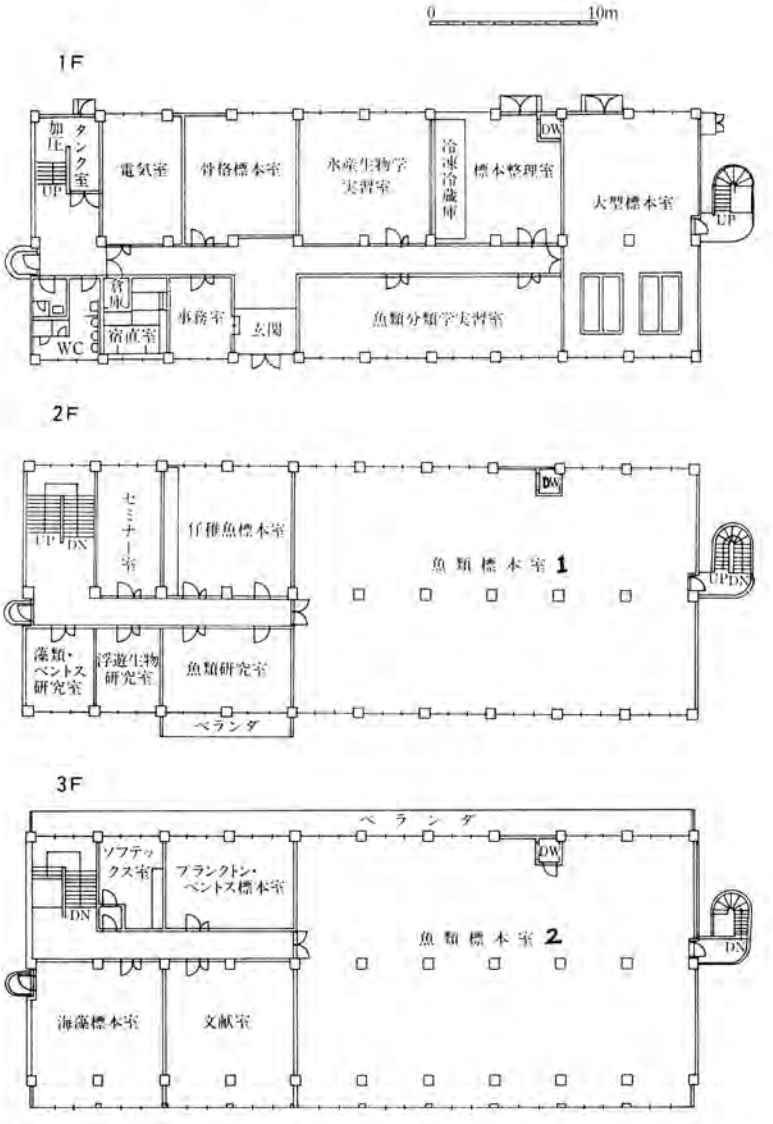
ここに収容されている魚類標本は世界中から約 8,000 種，約 11 万点，約 25 万個体に（一部未整理のものをも含む）上る．そのコレクションで充実しているものは：分類群別には①フサカサゴ科魚類，②ウシノシタ亜目魚類，③カレイ亜目魚類，④ソコダラ科魚類，⑤アナゴ科魚類，⑥ウツボ科魚類，⑦タイ型魚類，⑧サバ亜目魚類，⑨カジキ亜目魚類，⑩コバンザメ科魚類，⑪ニベ科魚類，⑫イボダイ亜目魚類，⑬ネズッポ科魚類などであり，地域別には⑭日本産魚類（主として故松原喜代松教授と門下生によって採集されたもの，“魚類の形態と検索”執筆に使用されたものをも含む），⑮アルゼンチンパタゴニア沖の底魚類，⑯チリーパタゴニア沖の底魚類，⑰ニュージーランド近海の底魚類，⑱南アフリカ沖の底魚類，⑲サハラ沖の底魚類，⑳北西大西洋海域の底魚類，㉑アラビア海北部海域の浮魚および底魚類，㉒九州・パラオ海嶺域の底魚類，㉓南支那海の魚類，㉔ベーリング海の底魚類，㉕オーストラリア南岸沖の底魚類，㉖パプア・ニューギニアの浮魚類などである．

主として若狭湾と舞鶴湾からの卵仔稚魚標本が，初期生活史や生態の研究を目的として採集されたが，現在まだ未整理なので，今後の整理をめざしている．本標本は成魚標本の配列と同様の整理・保管を行うつもりなので，未同定の卵仔稚魚の同定のために欠くことのできない成魚標本との比較が容易にできると言う利点を有している．

本標本館の魚類標本には，研究の集中したところとそうでないところがあり，むらが多いし，まだまだ蒐集が充分でない部分も多々あるので，それらの点を補足して，さらに充実したものにして行きたい．そうすることにより，魚類分類学，魚類機能解剖学，魚類生態学さらに水産生物学などの基礎的研究材料，比較研究材料などとしての価値をさらに高めて行くことができ，将来は本標本館を名実ともに全国共同利用研究施設として，我国の魚類学の発展のための礎の一つになれればと考えている．その実現のための第一歩として，毎年 1 回秋に，全国の魚類研究者を集めてシンポジウムを開いて行く予定である．今年度は「第 1 回魚類分類談話会」として 11 月 2～4 日に約 60 名の参加者により盛会のうちに開催された．

最後に，水産生物標本館の公式英名を考える段になって大変難渋した．日本語では当標本館を決して博物館とは呼べないのであるが，英語では museum としか呼びようがないと言うことに気がついた．即ち museum とは本来，学問・芸術の研究のための殿堂であり，それを基礎とした公開展示と言うことが付随して来るものである．日本語の博物館と言う語には前者よりも後者が色濃く暗示されているように思われる．そのような訳で水産生物標本館→Aquatic Natural History Museum と言う

水産生物標本館平面図



図式が，→は決して＝ではないかも知れないが，できあがった訳である．

Museum にふさわしい当水産生物標本館の目標は標本（成魚，卵仔稚魚，骨格，耳石，鱗など）と記録（登録，原図，魚類学関係の別刷，本その他の文献，野帖，データシート，計数値，測定値，写真，X線写真など）の蒐集・整理・保管に全力を挙げることであり，その上に立った有効な展示を行ない一般公開すべく，現在博物館法適用の申請を行なっているところである．専任職員の申請も建物の概算要求と同時に行なったのであるが，それが認められなかったので，人員不足により本来の活動（研究，標本蒐集，標本再整理，標本貸し出し，標本交換など）がとどこおり勝ちである．今後も専任職員の定員化を目ざして行きたいが，それが実現されるまでは上記の悪条件を克服して頑張って行きたい所存なので魚類学会会員のみなさんの御協力をお願いいたします．宿泊所も完備しているので，当水産実験所を来訪しここに滞在して研究標本を調べ，その上で上記のことを充分理解していただき，借り出しなどの実際を規則にそってなるべく自ら進めて下さることで我々の手助けをしていた

だきたい．手紙などで「ある分類群の魚類をなるべく多く貸して欲しい」などと言う要望には今のところ応えられないのが実状です．もし文書などで借用を申し込まれる場合には，どうしてもその研究に欠かせないもので，できる限り具体的に標本番号などを知らせて下さるようお願いいたします．

所在地：〒625 京都府舞鶴市字長浜宮有無番地 Tel. 0773-62-5512～3

交通：関西・鳥取方面からは国鉄舞鶴線西舞鶴駅下車，駅前より京都交通バスにて中舞鶴（大きな陸橋のある三叉路）下車（所用時間約 15 分），徒歩約 25 分で実験所へ．北陸方面からは国鉄小浜線東舞鶴駅下車，大門三条まで徒歩約 7 分，大門三条より京都交通バスにて中舞鶴下車（所用時間約 10 分），徒歩約 25 分．舞鶴市にはタクシーの流しはないが中舞鶴バス停附近にタクシー会社あり，タクシーで中舞鶴から実験所まで約 5 分．北海道方面からは小樽～舞鶴間に新日本海フェリーあり．フェリーは西舞鶴港発着（3～4 年後にはフェリー埠頭は東舞鶴港に移る予定）．西舞鶴港フェリー埠頭から中舞鶴への最寄りのバス停（広小路）までは徒歩約 5 分．

問い合わせ：中村泉　京都大学農学部附属水産実験所 Tel. 0773-62-5512～3 ex. 23．または中坊徹次　〒606 京都市左京区北白川追分町　京都大学農学部水産学科水産生物学研究室　Tel. 075-751-2111 ex. 6222.

利用方法：利用（宿泊）希望者は申込書を水産実験所か農学部水産学科の事務室へ請求し，利用（宿泊）目的，利用期間，人数，利用希望設備・機器，予定到着日時などを記入して実験所事務室宛に申し込む．緊急の場合は電話でも可．5～7 月に各々 1 回ずつ 1 週間～10 日間の学生実習があり，宿泊所は満員になるが，それ以外の期間は研究のための長期宿泊は随時可．（中村 泉・中坊徹次 Izumi Nakamura and Tetsuji Nakabo）

魚類分類談話会のこと
Seminar for Systematic Ichthyology in Maizuru, Nov. 2–4, 1984

秋も深まった 1984 年 11 月の初め，私たちは魚類分類談話会を舞鶴市長浜にある京都大学農学部附属水産実験所の水産生物標本館にて開いた．会の目的は，ひとつには魚類分類学を研究する人たちに，新築の水産生物標本館と夥しい数の魚類標本コレクションの御披露目がある．つまり，これらを利用していただくきっかけをつくりたかったことである．そして，少し厚かましいのだが，私たちが標本を整理する時におかしている種の誤同定を，利用していただく際に，それぞれの専門の研究者の方々になおしていただきたいと思ったのである．もうひとつは，魚類学の基礎としての魚類分類学に関して，日頃考えていることを，いろいろな人たちと思う存分，たとえそれがケンカに近い形になったとしても，語りあいたかったこと，である．魚類学の進歩と発展を担うべく，年々重みを増している日本魚類学会年会に比べて，マイナーであり，談話会で研究発表をしても決して業績にはならない，いわばライト感覚の会をもちたかったのである．しかし，ただ軽いだけではだめで，あとに何か残るような問題提起的な会，というのが私たちの目論見であった．

こういうことをパンフレットにかき，いろいろな人達に配った結果，北海道から沖縄まで日本列島のすみずみから，約 50 人に参加していただき，14 人に話題提供をしていただいた．私たちとしては，大変に盛会であったと思われ，参加者の方々ならびに話題提供をしていただいた方々には深く感謝しております．ここでこの会の紹介と，顛末を記しておきたいと思います．

会は基本的には研究発表会と標本観察会で構成され，前者は討論会であるが，後者は参加研究者の方々に御専門の分野の標本を観察していただき，それぞれの御研究に資すると伴に，私たちの誤同定もなおしていただいた．日程は，1984 年 11 月 2 日 16：00～標本館見学，3 日 9：00～18：30 研究発表会，4 日 9：00～標本観察会，であった．4 日の標本観察会の時間は自由であり，これに一週間ぐらい費された方もいた．研究発表のテーマと発表者は以下の通りである．

1. ウツボ科魚類の内部骨格について．波戸岡清峰（京大・農）
2. 日本産ボラ科魚類の分類と分布．瀬能　宏（琉大・理）
3. コバンザメとミルクフィッシュからみた仔稚魚の行動観察の意義について．中島東夫（和歌山県自然史博物館）
4. イトヨの降海型と陸封型は種の差か―組織学的証左．本間義治（新潟大・理）
5. 沖縄海洋博水族館紹介．戸田　実（沖縄海洋博水族館）
6. カマツカ亜科の単系統性の検討．細谷和海（京大・農）
7. 西部大西洋フエダイ属 11 種を例にとって検索表作製上の問題点．岩槻幸雄（宮崎大・農）
8. カマス科魚類の分類学的再検討．吉野哲夫（琉大・理）
9. 大西洋産ハナダイ類と太平洋産ハナダイ類との比

水産生物標本館前での参加者記念撮影

較．片山正夫（防府市）・尼岡邦夫（北大・水）

10．魚類の系統分類学における生化学的遺伝形質の応用法．谷口順彦（高知大・農）

11．魚類分類学における属について．中坊徹次（京大・農）

12．属（genera）をどう考えるか．川那部浩哉（京大・理）

13．分岐分類学の最近の話題，いわゆるパターン・クラディスティックスについて．新井良一（国立科博）

14．中新統松江層産ワカサギに似た小魚化石．友田淑郎（国立科博）

15．総合討論

ウツボ科の波戸岡氏，ボラ科の瀬能氏，カマツカ亜科の細谷氏，そしてカマス科の吉野氏には，それぞれの研究成果を発表していただいた．特に吉野氏と波戸岡氏は，科の中での分類の再編成を示唆していただいた．従来の属分類に対して疑問を投げかけられた．本間氏のイトヨ降海型と陸封型の発表は不稔性のメカニズムについてであり，これをきいて大変感銘をうけた大学院生がいた．中島氏，戸田氏の発表は水槽内での生態観察に関してであった．特に戸田氏にはヤジブカの出産シーンのビデオをみせていただき，楽しいひとときをすごさせていただいた．岩槻氏の西部大西洋フエダイ属の検索表に関する発表は，大変合理的な検索表を示していただくと同時に，検索表に対する問題提起もしていただいた．片山氏は大西洋と太平洋のハナダイ類の比較を通じて，属の再検討について話された．谷口氏はニベ科，アジ科，タイ科について，生化学的遺伝形質から系統類縁関係を検討してみると，属レベルにおいて，従来，形態のみから考えられてきた関係と一部異なったものになってくる，と形態至上主義に対して再検討をうながすような興味ある発表をされた．川那部氏と中坊は分類学における属の＜存在＞についての私見であった．川那部氏は小生息場所をめぐって生態的側面から述べられ，中坊は形態のパターン認識と生物界の階層性という側面から述べた．新井氏は分類学の方法論の話であり，cladistics が classic と modern のふたつに分岐している現状の紹介と，それらを比較して，それぞれの特徴を話された．友田氏は，第三紀中新統から出た小魚の化石がアユではないか，ということについて述べられた．研究発表の内容は，ざっと以上の通りです．

総合討論では属の問題について議論が集中した．しかし，時間が 20～30 分ぐらいしかとれなかったためか，内容的にはもうひとつ，といった感じがする．分類学の理論と，現実の魚の話とが咬み合っていなかったと思う．属について討論する材料としては，14 の発表テーマからみて十分であったと思われるのだが，いかんせん，世話人の力量が不足していたことを痛感している次第である．

このあと，新宿泊棟のホールで懇親会を行ったのだが，あちこちで議論の花が咲いて，参加者の皆様のおかげで大変楽しい会に盛りあげていただいた．総合討論で

の不完全燃焼のせいか，1部のグループでは翌朝5時まで議論が続いたという．酔いにまかせてか，あるところから，次回は＜亜種＞を中心にしようという声が出た．この声に，もし御賛同の方がございましたら，ぜひ舞鶴の魚類分類談話会にきて議論に加わって下さい．あるいは，こういうテーマがよい，といった御意見がございましたら，中村 泉（〒625 京都府舞鶴市長浜　京大水産実験所）か中坊徹次（〒606 京都市左京区北白川追分町 京大農学部水産学科）までお寄せ下さい．

(中坊徹次 Tetsuji Nakabo・中村 泉 Izumi Nakamura)

会　記・Proceedings

昭和 59 年度第 8 回役員会

昭和 60 年 2 月 7 日(木)，於東京水産大学．

出席者：上野，岩井，新井，石山，黒沼，高木，中村，藤田，松浦，望月．

議事：1．報告事項．2．学術会議会員選挙の経過を報告し，第6部水産学研究連絡委員会会員候補および推薦人をそれぞれ日比谷京，岩井保，第4部動物科学研究連絡委員会会員候補および推薦人をそれぞれ上野輝弥，本間義治の各氏とすることを最終的に確認した．3．決算，予算について検討した．4．年会運営について検討した．5．「国際会議」について組織委員会より報告をうけ，検討した．6．その他．

昭和 59 年度第 9 回役員会

昭和 60 年 3 月 19 日(火)，於東京水産大学．

出席者：岩井，阿部，新井，尾崎，黒沼，佐藤，高木，中村，藤田，望月．

議事：1．第 7 回および第 8 回役員会記録の確認をした．2．報告事項．3．予算および決算について検討し，案を作成した．4．年会運営について検討した．5．日本学術会議会員選挙における候補者推薦人の選出手続きについて検討し，案を作成した．6．「国際会議」について組織委員会より報告をうけ，検討した．7．役員人事について検討し，尾崎久雄氏が編集幹事をやめ，かわりに隆島史夫氏が庶務幹事から編集幹事にかわることを了承した．8．その他．

昭和 60 年度年会

昭和 60 年度年会が，昭和 60 年 3 月 31 日(日)～4 月 1 日(月)に，国立科学博物館本館で開催され，以下の会合が行なわれた．

1．評議員会

3 月 31 日，11:35～12:40．37 名の評議員と 3 名のオブザーバーが出席し，岩井保氏を議長に選出した後，以下の議題で開催された．1．会長挨拶．2．昭和 59 年度会務報告．3．昭和 59 年度決算報告．4．昭和 59 年度監査報告．5．昭和 59 年度編集委員会報告．6．役員人事．7．日本学術会議会員選挙に関する報告，および選出手続きに関する提案．8．昭和 60 年度予算(案)．9．国際魚類研究会議組織委員会報告．10．その他．このうち，日本学術会議会員選挙における候補者・推薦人の選出手続きに関する提案は以下の通りである．

「日本学術会議の会員選挙において，当会からの候補者および推薦人の選出手続きは以下の通りとする．

(1) 被選挙人を日本人正会員とし，評議員の無記名投票により選挙を行なう．

(2) この結果を尊重し，役員会は上位得票者と個別に折衝し，候補者推薦人を決定する．

なお，どの部・研究連絡委員会に候補者推薦人を出すかは，役員会で決定する．」

以上の提案を含め，これらの議案はすべて承認された．

2．総会

3 月 31 日，13:00～13:30．約 65 名出席．中村泉氏を議長に選出した後，下記の議題で行なわれた．1．会長挨拶．2．昭和 59 年度会務報告．3．昭和 59 年度決算報告．4．昭和 59 年度監査報告．5．昭和 59 年度編集委員会報告．6．役員人事．7．日本学術会議会員選挙に関する報告，および選出手続きに関する提案．8．昭和 60 年度予算．9．国際魚類研究会議組織委員会報告．10．その他．

本総会で，日本学術会議会員選挙における候補者・推薦人の選出手続きに関する提案は原案通り承認された．

3．研究発表会（第 18 回）

3 月 31 日，9:00～11:30，13:30～17:00，4 月 1 日，9:00～12:00，13:30～17:00，第 1 会場，第 2 会場，および展示発表に分かれ，76 題の研究発表がなされた．参加者は 3 月 31 日は約 240 名，4 月 1 日は約 200 名であった．

Papers presented at the XVIIIth Annual Meeting, 1985

(March 31 to April 1, 1985)

Yoshitaka Yabumoto: Lamnid shark teeth of *Carcharodon angustidens* from the Oligocene beds in Kitakyushu, Japan.

Shigeru Shirai and Kazuhiro Nakaya: An undescribed squalid shark collected from Kyushu-